

第四十節の隠された歴史——第十一番

第十一番目

Jeff Pippenger

2026-05-21

ヨエル書は、おそらく聖書における後の雨についての最も直接的な啓示であり、ヨエルは冒頭においてまず、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会によって成し遂げられた背教の四世代に言及している。ヨエル書の冒頭の節に示されるこの破壊の四段階の激化は、エゼキエル書第八章における四つの、段階を追って激化する忌むべきことと一致している。1863年から1888年までは第一世代を表しており、それは、ハバクク書第二章に示され、また十戒の二枚の石の板によって示される契約を象徴するものとして、1843年および1850年の先駆者たちのチャートに表されているミラー派の基礎的使命の拒絶を表している。

1888年から1919年は、信仰による義の経験を拒んだ世代を表しており、その拒絶はフィラデルフィアの教会によって表象される経験を生み出す。第一の世代において、反逆はウィリアム・ミラーによって代表される指導者の働きに焦点を当てていたが、1888年の第二の世代においては、『預言の霊』の指導に対して反逆がなされた。1919年の第三の世代は、ウィリアム・ウォーレン・プレスコットの著書『The Doctrine of Christ』によって始まり、1956年の『Questions on Doctrine』によって終わった。その第三の世代は、アドベンチズムがアメリカ医師会の医療慣行の認定、ならびに背教したプロテスタントおよびローマ・カトリックの学識者による自派の大学の認定を求める中で、世と妥協した世代であった。

第三の世代において、エレン・ホワイトの筆による教育的勧告は退けられ、ギリシアの教育哲学に代表される世の偽りの教育実践に取って代えられた。ギリシアの教育は、テネシー州ナッシュビルにある複製パルテノン神殿に祀られている女神アテナによって表象されている。

真の教育は、預言者エリシャに関連する預言者たちの学校において、聖書の中に模範として示されている。紀元前167年のマカベアの反乱から紀元70年のエルサレム滅亡に至るまでの期間は、古代の文字どおりの栄光ある地の文化と国家の中へギリシア教育が侵入してきたことに対する抗議が、その大きな部分を成していた。マカベアたちの抗議は、あらゆる水準におけるギリシアの影響に対する反乱であったが、ギリシアの教育的影響は、マカベア熱心党の歴史と動機の中にあまりにも深く浸透していたため、ギリシア教育が、イエス・キリストを彼らのメシアとしてユダヤ人が拒絶したことに関連する、おそらく最大の要因であったという現実と切り離すことはできない。ユダヤ人に対するギリシア教育の否定的影響と、偽りの教育がユダヤ人によるキリストの拒絶と十字架刑にいかにか寄与したかを明らかにする書物が著されてきた。

マカバイの反乱は、現代の霊的に栄光ある地における1776年の反乱と一致している。現在、アメリカ合衆国には4,000を超える登録大学があり、それらはギリシア的およびイエズ

ス会的教育慣行の哲学の上に築かれている。過去十年以上にわたる無政府状態と不法は、アメリカ合衆国における、いわゆる教育センターに直接さかのぼることができる。そこでは数十年にわたり、フランス革命期の悪魔的哲学に由来するグローバリストの哲学を受け入れるよう、すでにメディアや娯楽の供給源によって条件づけられていた学生たちが、教化されてきたのである。今日の大学の学生たちは、白人、キリスト教徒、そして真のアメリカ史を攻撃するよう設計された教育センターに入る以前から、ソドムとゴモラによって表象される生活様式を受け入れるよう、すでに条件づけられていた。今日、聖書および預言の霊において示されている、正義と真理が街路に投げ捨てられることを成就している、絶えざる二重基準の司法制度を理解しようと望むアメリカ合衆国の一市民は、現在の状況が、人生の最も早い時期から、人類をエリート主義的グローバリスト——すなわち竜の勢力——の支配下に置くよう設計された教育制度によって教え込まれる、意図的に仕組まれた攻撃によって生み出されていることを理解しなければならない。

エレン・ホワイトの著作には五つの主要な主題がある。すなわち、教育、健康改革、キリスト者の生活、大争闘の主題、そして実際の敬虔である。教育は預言の霊における五つの主要な主題の一つであり、エレン・ホワイトは、神の御言葉に記されたすべての預言者と同様に、まさしく聖書的預言者であった。とりわけこれは、彼女の生涯が十四万四千人のための、またその模範であることを意味する。だれかが、わたしたちの模範はキリストのみであると考える前に、パウロは次のように述べている。

たといあなたがたには、キリストにある教師が一万人もいる、父は多くはありません。キリスト・イエスにあって、この私が福音によってあなたがたを生んだからです。ですから、あなたがたに勧めます。どうか私に倣う者となってください。コリント人への第一の手紙 4:15, 16.

預言者として、エレン・ホワイトは一つの模範である。エレン・ホワイトが理事の役割を受け入れたのはただ一度だけであり、その時とは、彼女の奉仕の五大主題の一つとして示された真の教育の原則を受け入れる学校の設立に際してであった。テネシー州マディソンにあるその学校は、テネシー州ナッシュビルの大都市圏内に位置している。彼女は1904年から1915年に死の前年に至るまで、マディソン・カレッジの創設理事会の一員となることに同意しただけでなく、その学校が設立された土地の選定においても重要な役割を果たした。ナッシュビルは、マカベア時代の歴史においてユダヤ人が自らのメシアを受け入れることを妨げる一助となったギリシア的教育制度の中心地であり、そのマカベアの歴史は、私たちが今生きている時代の背教したプロテスタントイズムを予型している。マカベアの系統は、四十節の隠された歴史の中に明確に提示されており、今やまさに同一の——ただし現代版ではあるが——破壊的なギリシア教育の実を十分に教え込まれた背教したプロテスタントイズムを表している。

アドベンチズムの第三世代において、1888年に預言の霊を退けた指導者たちは、自らの教育制度をこの世の認定制度の支配に委ねることを選んだ。ナッシュビルは、真の教育と偽りの教育の双方の象徴的中心を表している。預言者は、世がギリシア的教育を奉安するために選んだのと同じ都市を選ばれた。なぜなら、ギリシア的教育は、真理を孤立した諸科目へと分離することによって全体を破壊することを基礎としているのに対し、真の教育は、シスター・ホワイトの他の四つの主要主題、すなわち健康改革、実際の敬虔、

キリスト者の生活、そしてとりわけ『各時代の争闘』の主題の根本的基盤だからである。

イエスは常に終わりを初めによって例証されるのであり、エデンの園における試練は、今まさに世界が直面している試練を例示している。終わりににおける試練は、あらゆる聖書的試練と同一である。なぜなら、神は決して変わることがないからである。聖書的試練とは、三段階の試験過程であり、その試験過程の終わりに明らかにされる二つの階級を生み出すものである。第一の天使は、その三段階を、神を畏れ、神に栄光を帰せよ、さばきの試金石としての時が来たからである、と表現している。第一段階は、善悪の知識の木から食べてはならないという命令であった。神を畏れるべき必要な畏れを欠いていたために、エバはその木の試練に失敗し、善であると同時に悪でもあるものとして表象されたその実を食べた。アダムの神への畏れも、彼がその木の反逆に加わるのを防ぐことはなく、こうして、神性のとどまる臨在を欠いた生を彼らが示したとき、さばきが二人の上にもたらされた。

終末時代の試練は、人類の恩恵期間が終わりに近づく直前に、イエス・キリストの黙示のうちにおいて封印が解かれる知識の増加を食するようとの警告をもって始まる。アドベンチズムの内にある者であれ、その外にある者であれ、その試練は、私たちの時代において封印が解かれる「知識」の増加を受け入れるか、あるいは拒むかに基づいている。その知識の試練は、善または悪のいずれかの知識を表す、園の試しの木によって象徴されている。真の教育は1904年にテネシー州ナッシュビルに位置づけられ、かつ象徴され、偽りの教育は1897年にナッシュビルに位置づけられ、かつ象徴され、その後1920年に恒久的建造物として再建された。女預言者の生涯において、真の教育はナッシュビルに記念として据えられ、偽りの教育もまた据えられた。1915年の彼女の死後、偽りの教育はパルテノン神殿の第二の、そして恒久的な建設において復興され、真の教育は、ラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会の指導部による世との妥協を通して拒絶された。

ナッシュヴィルの愛称である「南のアテネ」は、1897年の百周年博覧会において、その建造物が中心的存在として選ばれることに影響を与えた。博覧会の会場に建てられた建物のうち、古代の原型に基づくものは少なくなかった。しかし、パルテノンだけが唯一、正確な複製であった。今日のテネシー州ナッシュヴィルは音楽で有名であるが、ジョニー・キャッシュ博物館ができる以前、ナッシュヴィルは歌ではなく、教育によって名を知られていた。

1850年代までに、ナッシュヴィルは数多くの高等教育機関を設立したことによって、すでに「南部のアテネ」という異名を得ていた。また、公立学校制度を確立した最初のアメリカ南部の都市でもあった。世紀末までには、ナッシュヴィルにおいて、フィスク大学、セント・セシリア・アカデミー、モンゴメリー・ベル・アカデミー、メハリー医科大学、ベルモント大学、ならびにヴァンダービルト大学が相次いで開校することになる。当時、ナッシュヴィルは富と文化に満ちた、南部でも最も洗練され教育水準の高い都市の一つとして知られていた。

不法の奥義は、靈感による御言葉において、名詞であると同時に動詞でもある。靈感は、サタン、そしてシスター・ホワイトがサタンの「右腕の者」と呼ぶ教皇を、不法の奥義

として特定している。しかしまた、「不法の奥義」は、真理と誤謬との混交をも描写している。ヨエルの四世代にわたる背教は、エゼキエル書第八章における四つの段階的に増大する忌むべき事柄と一致している。その二人の証人は、黙示録の最初の四つの教会と一致しており、第三の教会は、コンスタンティヌスによるキリスト教と異教主義との結合という妥協によって表されている。それら最初の四つの教会は、古代イスラエルの歴史と一致しており、それは現代イスラエルの歴史を象徴している。

古代イスラエルの第三世代において、イスラエルの王たちは、神の民と決して同盟を結んではならない他国民と同盟を結んだ。古代の文字どおりのイスラエルとキリスト教会との平行関係は、黙示録に示されているとおり、『Habakkuk's Tables』と題する研究において明確に提示されている預言的テーマである。ヨエルは、神の選ばれた契約の民であることから「断たれる」第四の最後の世代を、エゼキエルにおける四つの段階的に増大する忌むべき事の中で太陽を拝している二十五人の長老たちと一致させている。ラオディキヤのセブンスデー・アドベンチズムが日曜法の時に太陽を拝して断たれるその第四世代は、538年、あるいは間もなく到来する日曜法における教皇制の支配を象徴する第四の教会ティアティラと一致している。第三の教会ペルガモは、古代イスラエルが異教の王国と連携した場合であれ、コンスタンティヌスが異教主義をキリスト教と結合させた場合であれ、「妥協」を表しており、そしてそれら二人の証人は黙示録十三章の地の獣の第三世代に語りかけている。

四百／四百三十年の奴隷状態の間に、他の諸真理の中でもエジプトによって予表されていたアメリカ合衆国の四世代は、ついにはファラオが紅海の水の中で溺れ死ぬことによって終結した。これらの水は、神が預言者モーセを通して古代イスラエルに救出をもたらされたとき、裁かれるべきであったその国民の終わりを画した。アメリカ合衆国は、神の教会に対する裁きが完結する時期に裁かれるのであるから、神が御自分の選ばれた民を救い出しておられる間、水をその場にとどめていた東風が解き放たれることによって、ファラオの命を終わらせたその水がファラオの上にもたらされたことに留意すべきである。東風は、黙示録第十一章の地震が到来するとき、日曜法を打つ第三の災いである。

地の獣の第四にして最後の世代に先立つ世代は、共和党の角とプロテスタントの角の双方において成就する。共和党の角における、その第三世代において成し遂げられた妥協は、第一次世界大戦をめぐる時期に起こり、それは合衆国がその経済構造を連邦準備制度のグローバリストたちに引き渡す転換点を画した。同じ時期に、ラオディキヤ的セブンスデー・アドベンチズムは、その医療および教育の働きを、世俗の教育と医療の基準によって「認可」されることを求めた。動詞としての「不法の奥義」は、コンスタンティヌスおよび古代イスラエルの王たちがこの世の権力と行った妥協を表している。この妥協を描写するために靈感によって用いられた語は「amalgamation」であり、それはエレン・ホワイトの時代の辞書では次のように定義されていた。「アマルガムとして混ぜる、または結合すること。すなわち、混合すること。」善悪の知識の木は、amalgamation の木、妥協の木である。「最後の大いなる闘争」とは日曜法の危機であり、その危機のためのサタンの備えが「不法の奥義」であって、それは人間の知恵を神的啓示と混ぜ合わせるのである。

「サタンは、すべての者がいずれかの側につくことになる最後の大いなる闘争に向けて、その計画をせわしく進めている。…」

「世において優勢を占めている声に耳を傾け、その力を見定めなさい。祈りの声がどこかにあるであろうか。神が認められているしるしを、あなたは少しでも見ているであろうか。祭司たちはいる、しかも大勢いる。だが彼らは、エホバの律法をその足の下に踏みこみ続けている。彼らの衣は、魂の血に染まっている。群衆は悪霊どもに犠牲をささげている。見なさい、従順と不従順との間でためらっている者たちよ。想像のうちに、サタンの祭壇で礼拝している広大な群衆を見なさい。いわゆる高等教育と呼ばれるその音楽に、その言葉に耳を傾けなさい。しかし神はそれを何と宣言されるであろうか。——不法の奥義である。」 Pamphlets, 004, 11.

最後の戦いにおいて、「すべての者がいずれかの側につく」とき、エデンの園の試みが繰り返される。初めにおいては園の中央にある一本の木に限られていたその試みが、終わりには全世界において繰り返される。最終の戦いに先立ってサタンが行う働きは、「不法の奥義」であり、それは「高等教育」と規定されている。地の獣の国における「高等教育」の象徴は、テネシー州ナッシュビル、「南部のアテネ」に見いだされる。そこには、かつてナッシュビルにおいてマディソン・カレッジによって表されていた真の教育と対照をなすものとして、パルテノン神殿が位置している。以下の靈感による声明は本稿の末尾に全文を引用するが、この時点で幾つかの点が考慮されるべきである。

「すべての者は、この地上の歴史の終結においてきわめて大きな位置を占める不法の奥義を、注意深く探り究めるための知恵を必要としている。…」

「回復された楽園へ至る中道は存在しない。この終わりの日々のために人間に与えられた使命は、人間的考案と混合されることではない。……」

「神が高い信任の地位に引き上げられた者たちは、天の光から人間の知恵へと向きを変えることがありうる。……神と共に働く者となり、神の是認を受けるにふさわしい品性を持つようとする者はみな、神の敵から自らを分離し、キリストがヨハネに託して世に与えさせた真理を堅持しなければならない。」 Manuscript Releases, volume 18, 30-36.

「知恵」を必要とする「すべての者」とは、最終的に二つの礼拝者の階級を生み出す試練の過程へと導き入れられるすべての者を表している。「賢い者」とは、必要な「知恵」を確保する者たちである。その試練の過程は、人間の恩恵期間の終了直前に、イエス・キリストの啓示が開封される時に始まる。その開封は、「知識の増加」を開始させる。イエス・キリストの啓示に伴う試練に直面する者たちは、日曜法における東風の到来に先立って導き、備えさせ、聖別するために備えられた預言的知識の「油」を確保するであろう。「善悪の知識の木」は、食するか拒むべき、偽造された天のパンの象徴である。

ガリラヤにおいて、カペナウムの会堂で、イエスはその御働きの中の他のいかなる時にもまして、一つの出来事によって多くの弟子たちを失われた。そこにおける試みは、キリストの預言的な言葉が文字どおりのものであるか、霊的なものであるかということであり、その試みに失敗した者たちは、失敗した。というのは、人は神の口から出る一つ一つのことばによって生きるべきであることを、彼らが忘れたからである。キリストは、御自分が天から下って来たパンであることを明確に語られたが、その試みに失敗した者たちは、真理に、ギリシア人によって象徴される人間の知恵を混ぜ合わせてしまったのであ

る。

エバが園における失敗を始める以前に、キリストはアダムとエバの両者に対し、善悪の知識の木の実を食べてはならないと命じておられた。永遠の福音の三つの段階の第一は、神を畏れることである。

「知性に啓示の驚嘆すべき真理を把握させよ。そうすれば、それは決して軽薄な題目にその力を用いることに満足しなくなるであろう。それは、今日の青年たちを墮落させている、くだらない文学や無益な娯楽に嫌悪をもって背を向けるであろう。聖書の詩人や賢者たちと交わり、その魂が信仰の勇士たちの輝かしい行為によって奮い立たされた者たちは、この世の最も著名な世俗の著者たちを研究すること、あるいは世のファラオ、ヘロデ、カエサルたちの功業を観想し賛美することに携わっていた場合よりも、はるかに心において清く、精神において高められて、その豊かな思想の野から帰って来るのである。」

「青年たちの力は、その大部分が眠ったままである。なぜなら、彼らは神を畏れることを知恵の初めとしないからである。主がダニエルに知恵と知識をお与えになったのは、彼がその宗教的原則を妨げるいかなる力にも影響されようとしなかったからである。私たちの中に思慮があり、確固としていて、堅実な価値を備えた人がきわめて少ないのは、天から離れても偉大さを見いだせると考えているからである。」『青年への使命』255、256頁。

エバは「神への恐れ」を失った。彼女は神の御言葉の前に震えるべきであったが、それは十四万四千人の特質である。神を恐れることは三つの試みの第一であり、それは預言の御言葉が解かれるときに始まり、最終的には賢い者の階級と愚かな者の階級とを生み出す。賢い者となるよう定められている者たちにとって、その始まりは神の御言葉に震えることである。エバはこれをしなかったので、試みの過程の第二の段階に直面したとき、神に栄光を帰することができず、そして次いで裁きの時に直面し、そこでラオデキヤの裸を現した。

「キリスト者としての品性を完成しようとする者はすべて、キリストのくびきを負わなければならない。もしキリスト・イエスにあって天上の所に共に座そうとするなら、この地上にある間にキリストに学ばなければならない。キリストは御自身を喜ばせることをなさらなかった。彼の全生涯は、純粋で私心のない慈愛を発展させるものであった。彼は墮落した世界に対して、サタンとその会堂に対して、天の全宇宙に対して、墮落していない諸世界に対して、人間性が彼の神性と結び合わされるとき、神の律法に全く従順になり得ることを実証するために、人間性をお取りになった。すべての者は、『救われるためには、私は何をしなければならないのか』と問わなければならない。神が求めておられるのは、そのみことばにおののく、へりくだって砕かれた心である。私たちが天来の松明を受けることができるのは、ただ神の祭壇からのみであり、それを受けると、それは私たちに自らの無力さを余すところなく示し、キリストの尊厳と栄光を明らかにする。そのことが見えるとき、神は私たちに聖霊の導きの下に置かれ、聖霊は私たちにあらゆる真理へと導くのである。」『バイブル・エコー』1896年7月20日。

真理と誤謬との混淆は、サタンの働きであり、不法の奥義として特定されるものである。調査審判の最後の動きにおける全人類の妥協は、テネシー州ナッシュビルのパルテノン神殿に象徴的に刻み込まれている。

「われわれの青年たちを大学に送り、そこで彼らがギリシア語やラテン語の知識を得ることに時を費やしている間に、これらの言語を修得するために学ぶ不信仰な作家たちの思想感情によってその頭脳と心とが満たされるに任せることは、賢明ではない。彼らは、少しも必要ではなく、また大教師の教えと調和するものでもない知識を身につけるのである。一般に、このような仕方教育を受けた者たちは強い自尊心を抱く。彼らは自分が高等教育の頂点に達したと考え、もはや学ぶ者ではないかのように、高慢にふるまう。こうして彼らは神の奉仕のためには役に立たない者となる。多くの人々が比較的無益な教育を得るために費やしてきた時間、手段、そして学習は、彼らを実際生活に適した円満な男女とするような教育を得るために用いられるべきであった。そのような教育こそ、彼らにとって最高の価値を有するものであったであろう。」

「生徒たちは、わたしたちの学校を去るとき、何を身につけて携えて行くのであろうか。彼らはどこへ行くのであろうか。彼らは何をしようとしているのであろうか。他の者たちを教えることができるようにする知識を、彼らは有しているであろうか。賢明な父また母となるよう教育されてきたであろうか。彼らは賢明な教導者として一家の長に立つことができるであろうか。家庭生活において、自分たちの家庭が天の家族の象徴であるがゆえに、神が喜びをもってご覧になることのできる家庭となるように、自分たちの子どもをそのように教え導くことができるであろうか。彼らは、真に『高等教育』と呼ぶことのできる唯一の教育を受けてきたであろうか。」

「高等教育とは何であろうか。天の相を帯び、若い男女をキリストに似る者とし、神に代わって一家のかしらとして立つにふさわしい者とするのでなければ、いかなる教育も高等教育と呼ぶことはできない。もし一人の青年が、学校生活の間に、ギリシア語やラテン語、また不信仰な著述家の作品に含まれる思想についての知識を得ることに失敗したとしても、彼はさほど大きな損失を被ったことにはならない。もしイエス・キリストがこの種の教育を不可欠であるとみなされたのであれば、人間に委ねられたかつてないほど大いなる働き、すなわち世においてご自身を代表する働きのために教育しておられた弟子たちに、それをお与えにならなかったであろうか。しかし、その代わりに、主は聖なる真理を彼らの手に託し、その単純さのうちに世に与えさせられた。

「ギリシア語およびラテン語の学者が必要とされる時がある。これらの言語を学ばなければならない者もいる。これはよいことである。しかし、すべての者が、また多くの者が、それらを学ぶべきではない。ギリシア語およびラテン語の知識が高等教育に不可欠であると考える者は、遠くを見通すことができない。また、この世の人々が科学と呼ぶものの奥義についての知識も、神の国に入るために必要ではない。真の高等教育を排除し、学ぶ者とともに滅びる詭弁と伝承とをもって心を満たすのは、サタンである。」

「偽りの教育を受けた者たちは、天を仰いで見ようとはしない。彼らは、『世に来るすべての人を照らす』まことの光であられるお方を見ることができない。彼らは永遠の実在を幻影のようなものとみなし、一つの原子を世界と呼び、また一つの世界を原

子と呼ぶ。いわゆる高等教育を受けた多くの者について、神は次のように宣言しておられる。『あなたははかりで量られて、不足と見られた』—実際の業務についての知識に不足し、時をいかに最善に用いるかについての知識に不足し、イエスのためにいかに労するかについての知識に不足している。』『Review and Herald』1897年8月17日。

ナッシュヴィルの火の玉による警告は、任意の都市に向けられたものではなく、セブンデー・アドベンチスト、アメリカ合衆国、そして世界に直接もたらされた裁きである。ナッシュヴィルの火の玉は、アドベンチズムの諸類型、地の獣、そして世界という各区分に対して、それぞれ異なる属性を表している。ナッシュヴィルの火の玉は、善悪の知識の木によって象徴される偽りの教育に対する神の裁きである。

この研究は次の記事で続けることにする。

「主イエスは、さまざまな象徴的な像をもって、神の民を迫害したことで際立ってきた者たちの邪悪な性質と、その誘惑的な影響力とをヨハネに示された。地上の歴史の終結において大きな位置を占める不法の奥義を注意深く探り出すために、すべての者に知恵が必要である。神の律法を尊ばず、秘密結社や同盟に身を結びつけるこの世の支配勢力の住民の忌むべき行為についての神の提示は、真理の光を持つ民がこれらすべての悪から離れていることを可能にするはずである。世のすべての偽りの宗教家たちは、ますますその悪事を現すようになるであろう。なぜなら、あるのはただ二つの陣営、すなわち神の戒めを守る者たちと、神の聖なる律法に敵対して戦う者たちだけだからである。…」

女の子孫と蛇との間の敵意は、主によって明確に定められている。『わたしは、おまえと女との間に、またおまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼はおまえの頭を砕き、おまえは彼のかかとを砕く。』また、アダムに言われた。『おまえが妻の聲に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じた木から食べたので、大地はおまえのゆえにのろわれる。おまえは一生の間、苦しんでそこから食を得る。いばらとあざみを、おまえのために生えさせ、おまえは野の草を食べる。顔に汗してパンを食べ、ついには土に帰る。そこからおまえは取られたのだから、おまえはちりであるから、ちりに帰るのである。』

「人は自らの道に従い、サタンの誘惑と調和して行動し、神の知られた御旨に逆らうことによって、むなしく自分自身を高め、また祝福しようと企てた。こうして彼は、神の戒めに背くことについての経験的知識を得た。こうして彼は善悪を知った。こうして彼は神に対する誠実と忠誠を失い、悪と苦難の奔流を全人類に向かって開き放った。今日、同じ実験をしている者が何と多いことであろう！ 人はいつになれば、自らの安全の唯一の手段が『主はこう言われる』に対する完全な信頼によることを学ぶのであろうか。」

「サタンは、人間的な方法を通して、自らの考案したものを神の子らのうちに持ち込もうとしている。彼は、自らが神として受け入れられること、あるいは神の上にさえ置かれることを求めている。

「安息日を週の第一日に変更することによって、彼は人々を神の宣言を信じないよう導き、その結果、彼ら自身の道と計画とを、自分自身の目にも、またその歪められた

判断においても、きわめて賢明なものとみなすようにさせる。人間的方策によって、彼は人々に、神の明示された戒めを人間の伝統よりも効力の劣るものとみなさせ、常に聖にして正しく、かつ善であるその律法から逸脱することを、取るに足りないこととみなさせる。彼は、このようにして人間の働き手たちが従順な子らとして神と調和して歩むことを妨げるなら、この世界における神の御業の成就を阻止することができるのを見ている。」

「しかし、責任ある地位に立つ人間の代理者たちと結託するサタンの策謀は、罪の実験が試みられた後の今日においても、私たちの最初の両親の場合と同様に、恐れられ、また避けられるべきものである。私は、神の働きにおいて責任ある地位に置かれている人々は、他者を支配する自分たちの権利を過大に評価してきたと語るように示されている。人が占める地位は、その人の品性を変えるものではない。ある者たちは、自分たちが諸教会や療養所のために立案しなければならず、また自分たちの判断にはいかなる異議も差し挟まれてはならないかのように感じてきたようである。彼らは、あらゆる段階においてイエスに学ぶがよい。すべての人にとって、主が最高の権威であられるべきである。」

しばしばわれわれの教師であられたお方は、こう言われる。「人がへりくだってその神と共に歩み、砕かれた霊をもって神の道を取り、世俗的には大きな利益を示しているかに見えるサタンの提案を退けることは、なんと困難なことであることか。」神のみが据えられた堅固な土台の上に断固として立つ代わりに、人が自分の道を行くことの影響は、幾度となく繰り返されてきた。神が示されたまっすぐな道を歩むことを拒むなら、彼らは混乱へと至り、同じ試みと試練を受けている他の者たちに知恵を教えることもできない。いつになれば人は、神は神であって、変わるべき人ではないことを学ぶのであろうか。

「正しい道から離れた者の中には、神が彼らに負わせておられない責任を掌握しようとして、絶えず熱にうかされたようになっている者がいる。神は、すべての牧師とすべての医師に、真理の単純さを保つよう求めておられる。旧新約聖書の両方に啓示されている神の御子こそ、今日のこの世界の救い主である。すべての医療伝道者は、このお方からその訓練を受けるべきである。もし空中の権を持つ君から自らを離さないなら、彼は自分を信頼する魂を誤りに導くであろう。凡人には理解できないような計画しか持たないほど教育され、高く持ち上げられている人々に対しては、すべての者が警戒しなければならない。」

「罪の策略は、無限の思惟をも超えている。あらゆる災厄、あらゆる苦難と死は、悪の力の証拠であるばかりでなく、生ける神の真実の証拠でもある。真理、すなわち永遠に存続し、従順を通して命を与える生ける神の御言葉を知っていながら、サタンの巧妙さに従う人間の弱さは、驚くべきほど不可解である。神に教えられる者は皆、キリストを神の御子として認める。神の既知の宣言を信じない者は皆、罪が広く受け入れられていることを示しており、真理の完全な聖化を通して明らかにされた命と不死の側に立って働いてはいない。品性と言葉と精神に変化を生じないなら、魂は失われるであろう。」

「回復された樂園へ至る中道は存在しない。これらの終わりの日のために人に与えられた使命は、人間の考案と混じり合うことではない。私たちは世俗の弁護士たちの方

策に頼ってはならない。私たちは、サタンの手先によって目をくらまされた者たちのように行動するのではなく、祈りのへりくだった人々でなければならない。

「多くの者は信仰を持っているが、愛によって働き、魂を清める信仰を持っているのではない。救いに至る信仰は、単に真理を信じるというだけのものではない。『悪霊どもも信じて、おののいている。』神の御霊の靈感は、人に、品性を形づくり、単なる形式的な行為を超えて人をより高いところへ導く推進力となる信仰を与える。言葉と行いと精神とは、私たちがキリストに従う者であるという事実を証ししなければならない。」

「神が与えてくださった最大の光と祝福も、これら終わりの日における違反と背教に対する保障ではない。神によって高い信任の地位に引き上げられた者たちも、天からの光を離れて人間の知恵に向かうことがあり得る。そのとき、彼らの光は闇となり、神から託された能力は罨となり、その品性は神にとってつまずきとなる。神は侮られることがない。神から離れることには、これまでも常に、そしてこれからも必ず、それに伴う結果が続くのである。神を喜ばせない行為を犯すことは、それを明確に悔い改めて捨て去らないかぎり、またそれを正当化しようとするなら、悪を行う者を一步また一步と欺瞞の中へ導き、ついには多くの罪が咎められることなく犯されるに至る。神と共に働く者となり、神の是認を受けるにふさわしい品性を持つようとするすべての者は、神の敵から自らを分離し、キリストがヨハネに与えて世に伝えさせた真理を保持しなければならない。」『Manuscript Releases』第18巻、30-36.